

妄想とは、診断基準DSM-5によると、外的現実に対する間違っただ推論に基づく信念と定義される。精神病によくみられるが、状況によっては、健常者でも体験することが知られている。近年の異常心理学の研究では、妄想様観念と妄想を「妄想的観念」と総称して、連続的に扱うことが多い。妄想的観念がどのようなメカニズムで発生するかについて、生物学的な側面とともに、心理・社会的な側面の研究が進んでいる。本研究は、一般の大学生と統合失調症患者を対象として、妄想的観念の発生要因と維持要因を明らかにしたものである。妄想的観念の研究は、統合失調症の心理学的治療法や予防法を開発する上で大きな臨床的意義がある。

本論文は6つの研究から構成されており、大きく二部に分けられる。第1部は、大学生の妄想的観念に関して実証的に記述し(研究1)、発生要因(研究2)と維持要因(研究3)を明らかにしたものである。第2部は、統合失調症患者の妄想的観念を実証的に記述し(研究4)、発生要因(研究5)と維持要因(研究6)を明らかにしたものである。

第1部の研究1では、大学生の妄想的観念を多角的に測定した。これまで、妄想的観念を測るアセスメントツールが未整備であり、妄想的観念の次元間の関連が明らかでなかった。そこで、妄想的観念を測定するため、日本語版 Peters et al. Delusions Inventory (PDI) を作成した。大学生 604 名を対象に調査を実施し、信頼性と妥当性を確認した。また、相関分析と重回帰分析を用いて、次元間の関連を検討した。その結果、妄想様観念では、心的占有度と苦痛度の間には正の関連が見られ、確信度と苦痛度の間には正の関連がないことがわかった。研究1から、確信度よりも心的占有度のほうが、不適応に関連があることが示唆された。

研究2では、妄想的観念を持ちやすい健常者が、「早急な結論判断バイアス」を持つことを確認した。PDI 得点でスクリーニングした大学生 32 名を対象にベイズ確率推論課題を実施し、情報収集バイアスと確信度バイアスを測定した。研究2の結果から、妄想的観念を持ちやすい健常者も、早急な結論判断バイアスを持つことが明らかになった。

研究3では、妄想的観念による苦痛と、苦痛への対処行動の関係を検討した。先行研究では、逃避型対処行動は妄想的観念による苦痛と正に相関することが示されている。しかし、妄想的観念による苦痛と対処行動の間の影響の方向性が明らかではない。そこで、研究3では、「逃避型対処行動が、妄想的観念の苦痛を強める」という仮説を立て、大学生 186 名を対象に縦断調査を行い、共分散構造分析を用いて検証した。その結果、対処行動から苦痛へのパス係数が有意になり、仮説が支持された。研究3の結果から、健常者では、逃避型対処行動が、妄想的観念の苦痛を強めることがわかった。

第2部の研究4では、統合失調症患者の妄想的観念を多角的に測定した。統合失調症患者 86 名を対象に調査を行い、PDI の信頼性・妥当性を確認した。また、相関分析と重回帰分析を用いて、次元間の関連を検討した。その結果、統合失調症患者の妄想的観念では、心的占有度と苦痛

度が正の関連があることが確認された。また、確信度と苦痛度も正の関連があることが明らかになった。

研究5では、慢性期の統合失調症患者が、早急な結論判断バイアスを持つことを確認した。研究5では、慢性期統合失調症患者15名と健常成人20名を対象に、ベイズ確率推論課題を実施した。研究5の結果から、慢性期の統合失調症患者は、情報収集バイアスを持つこと、確信度バイアスを持たないことがわかった。また、統合失調症患者は、情報収集中の確信度変化が小さいこともわかった。

研究6では、妄想的観念による苦痛と、苦痛への対処行動の関係を検討した。先行研究では、逃避型対処行動をとりやすい統合失調症患者は、幻覚・妄想の重症度が強いことがわかっている。しかし、対処行動と妄想的観念による苦痛の間の影響の方向性が明らかではない。そこで、研究6では、研究3の結果を元に「逃避型対処行動が、妄想的観念による苦痛を強める」という仮説を立て、統合失調症患者43名を対象に縦断調査を行い、共分散構造分析を用いて検証した。道具的変数モデルによって、双方向の因果パス係数を算出した結果、妄想的観念による苦痛が、逃避型対処行動を強めることがわかった。

本論文においては、次の点が高く評価された。

- 1) 妄想的観念を多次元的に測定できる尺度を作成し、その信頼性と妥当性を確認した。その際、のべ1000名に及ぶ多数の被験者調査データを積み重ね、また、100名に及ぶ貴重な臨床サンプルのデータを收拾して、実証的な議論を組み立てていること。
- 2) 大学生と統合失調症患者の両方を対象として、同一の手法で研究を行い、研究結果の共通点・相違点から妄想の予防法・治療法を開発する基礎となる情報を提供していること。
- 3) 質問紙法だけでなく、実験法を用いて、妄想的観念の心理学的な発生要因の解明を試み、ある程度それに成功したこと。また、実験の結果から妄想研究の新たな方向性を示したこと。
- 4) 質問紙法を用いた研究では、多変量解析を効果的に用いて、妄想的観念の維持要因について、因果関係に踏み込んだ分析を行い、ある程度成功したこと。

なお、以上の研究の実施にあたって、倫理的な配慮は十分になされていると確認された。

これらの成果により、本論文は、博士(学術)の学位に値するものであると、審査員全員が判定した。なお研究1と研究4の一部は、すでに「臨床精神医学」誌上に公表済みであり、研究5はすでに「精神医学」誌上に公表済みである。また、研究3は、「パーソナリティ研究」誌上に公表予定である。